

春狐談

泉鏡花作

感應

感應かんおつといふのであらう。私わたしが小兒こどもの時とき不思議ふしぎな事ことがあつた。田舎いなかに居あて、父ちちは博覽會はくらんかいに出で品しゆつびんしたものがあつた。見物けんぶつ傍かたわ東京とうきやうに出で居ある留守るす、晩方ばんがたのことことで、ちやうどあかりを點とした時とき、四歳よっさいになる妹いもうとの、縁側えんがはに居あたのが、何かなにいつて駈かけた拍子ひやうしに石いしの上うへへ落おちて、頭あたまを切きつた。颯さつと血ちがはじいたのを見みて、母ははがあつといつて思おもはず聲こゑを立てたなすつた。

すると三日かみ措あいて、東京とうきやうの父ちちから手紙てがみが來きて、上うへ野のの宿坊しゆくぼうに一室ひとま借かりて居ある、一昨日いつさくじつ晚景ばんけい、座敷ざしきの障しや子越うしごし、縁側えんがはで、御身おんみがあつといふのを、形かたちは見みないで聞きいたが、別條べつてうはなきや、案あんじ暮くらすとの一通つう、おなじ月つきおなじ日ひおなじ時とき。

少し趣すこは異おちなるけれど、恐おそしく雷らいの嫌きらひな人ひとは、其日朝そのひあさあたりから豫あらかじめ晚ばんに鳴なるのが分わかるつて、多おほく

いふ處ところであるが、知己ちかづきの者ものに、戀人こひとから手紙てがみの來くるのを、つい一秒前べうまへに、今いまだなど、思おもつて悟さとることが出で來きるのがあある。何時いつかも庭にはへ朝顔あさがほを見みに出でようとして、片足かたあしおろしたがフツと氣きがついて、衝つと玄關げんくわんへ出でると、郵便ゆうびん、御存ごぞんじより。紅葉こうえふせんせい先生せんせいの内うちの玄關げんくわんに一人ひとり、夜中やちゆうの郵便物ゆうびんぶつを一纏ひとまとめにして配達はいたつが受取函うけとりはこへ入いれるのを、引出ひきだしながら暗くらがりで、手てに觸さはる感かん覺もちで、多おほくの中なかから、其故里そのふるさとの親おやのおとづれを分わけて取とつて誤あやまらないのがあつた。